高校生の生活意識と在籍学科との関連

植 田 義 幸

最近行われた大規模な高校生の生活意識調査を分析し、臨教審以降に行われた高等学校教育改革の中では制度的改革として最も注目された総合学科の課題を探る手がかりとする。平成18年度から20年度にかけて行われた約7000人を対象とする意識調査のデータをもとに、学校への帰属感、目的意識、特色に対する認識が高校卒業後の進路や在籍する学科の影響をどのように受けているかを、重回帰分析によって分析した。その結果、総合学科の生徒は、入学後に特徴のある意識を持っていること、その意識のあり方は高校卒業後にどのような進路に進もうと考えているかということと関連があることが見いだされた。

キーワード：高校生の生活意識、進路意識、総合学科、重回帰分析

1. 問題の背景

平成5年の高等学校設置基準改正によって、それまでの普通科、専門学科に並ぶ新たな学科「普通教育及び専門教育を選択履修を旨として総合的に施す学科」として総合学科が規定され、1994(平成6)年に全国で7校に総合学科が初めて設置された。総合学科は、直接的には1991(平成3)年に発足した「高等学校教育の改革の推進に関する会議」の第4次報告に基づくものであり、「普通教育及び専門教育を選択履修を旨として総合的に施す学科であり、高等学校教育の一層の個性化・多様化を推進するため、普通科、専門学科に並ぶ新たな学科として設けられた」(文部省初中局長通知「総合学科について」1993)のものであると説明されている。

この通知の中では、教育の特色として「将来の職業選択を視野に入れた自己の進路への自覚を深めさせる学習を重視すること」「生徒の個性を生かした主体的な学習を通して、学ぶことの楽しさや成就感を体験させる学習を可能にすること」の二つがあげられており、それに対応する制度として単位制によることや学校間連携の推進、専修学校等における単位や技能審査の認定等があげられている。教育課程の特色として、1年次(入学初年度)に「産業社会と人間」、2年次に情報に関する基礎的科目を必履修とし、3年次には課題研究を課している。また、先に挙げた「第4次報告」では、普通科や専門学科における教育内容の改善、学科の設置などの改革への努力をさらに促進し、高等学校教育が全体として、多様な生徒の持つ多様な能力・適性等に対応できるようになっていき「総合学科が今後の高等学校教育改革のパイオニア的役割を果たすことが期待される」(「第4次報告」)と述べている。

これらの特色を鑑みれば、総合学科の設置は、今日の国の中心的施策の一つであるキャリア教育の推進に先駆的役割を果たした施策の一つだとも言える。しかし、総合学科設置以来15年

以上を経過した時点で、所期の目論見が達せられたかという点について、その意義について、平成23年1月に中央教育審議会が文科相に対して行った答申では「安易な科目選択を行う傾向や、中学生や保護者等の理解・認知度の低さ、教職員の理解の不十分さ、多様な教科・科目開設に係る教職員の負担等の状況が見受けられる。このため、総合学科に対する理解の促進や、生徒に目的意識等を持たせる教育活動・体制整備等、教育環境の充実が求められる」（中央教育審議会答申『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について』42ページ）、「教育と職業との接続、生徒の学校から社会及び高等教育機関への円滑な移行について一定の成果を上げている学校が見られる一方、総合学科全体として見た場合、導入当時に期待されていた教育の特色をいかし、その役割を果たすことができているかどうかを含め、現時点での成果と課題の検証が必要である」（同答申44ページ）と指摘している。一般的に言ってこのような認識は妥当なものであろう。

では、当の総合学科における教育を受けた生徒はどのような意識を持っているのであろうか。学校教育法施行規則で学校評価が義務づけられているため、各学校で生徒による学校評価が行われているようであるが、それは各校の教育活動に対する評価ではあっても、生徒自身の成長が測れるものとは限らず、また、他校や他種の学科との比較も難しい。筆者は、平成18～20年度にかけて、近畿高等教育研究協議会（金子照基会長）が実施されたアンケート調査の作成、整理に関わった。この調査は20年度で終了し、データの整理や公表は同協議会で行われたが、特定の学科に焦点を合わせた分析は行われてない。また、現在、同協議会は活動を停止しており、このデータに基づく研究は当分行われることはない。そこで、筆者が同協議会からデータの提供を受け、発表の許可をいただいた。

このアンケート調査は、近畿地方2府4県の「特色ある学校づくり」の成果を総合的にとらえようとするものであり、総合学科のみに焦点をあてたものではないが、規模が大きく、他の普通科高校や専門学科、中でも各府県で独自に置かれた学科等が含まれており、総合学科生徒の意識の特徴を他の学科と比較検討する上で貴重なデータであると言える。

本稿では、総合学科に在籍する生徒の意識の特徴を概観し、中央教育審議会の「その役割を果たすことができているかどうかを含め、現時点での成果と課題の検証が必要」という指摘をふまえ、この学科が果たしてきた役割を考察する手がかりにしたい。

2. 方法

前述のとおり、本稿で用いるデータは、近畿高校教育研究協議会が実施したアンケートデータである。以下にその概要を述べる。なお、分析にはJMP9.0.2（SAS社）を用いた。

調査時期：平成18～平成20年の各年度7月。ただし、本稿では18年度と20年度の調査データのみを用いる。生徒の学年にあわせ、18年調査を「1年次調査」、20年調査を「3年次調査」、それぞれのデータを「1年次」データ、「3年次」データと表記する。

調査対象：近畿2府4県（滋賀、京都、大阪、兵庫、奈良、和歌山）の公立高等学校29校の平成18年度入学生徒。このうち、総合学科は4校である。有効回答数は、1年次調査が7179票、うち総合学科生徒は866票、3年次調査は6451票、うち総合学科生徒は917票である。1年次

調査の総合学科生徒の数が少ないのは、一部で配布・回収できなかった学校があったためである。

調査票の構成

Q1生活意識、Q2自己意識、Q3学習状況、Q4友人関係、Q5学校全体としての取り組みの認識、Q6実際の授業等の認識、Q7特色に対する意識から構成されている。本稿ではこのうち、Q1、Q5、Q6、Q7を用いる。詳細は次に述べる。

設問の詳細（表1）

Q1の「生活意識」は10の小問からなる。小問(1)、(2)、(4)、(5)、(7)は学習を中心とする「目的意識」をたずねている。また、(3)、(6)、(8)、(9)は「学校への帰属感」をたずねている。さらに、小問(10)で高校卒業後の進路を具体的に考えているか否かをたずね、Q1-2としてどのような進路を考えているかをたずねている。

Q2は自己意識をたずねる項目である。Q3は学習状況をたずねるものであるが、学校生活への適応をたずねる指標としても利用する。意識ではなく、学習実態に重点を置いた設問として用いる。Q4は学校への適応を表す指標として用いる。ただし、この3つは本稿では扱わない。

Q5～Q7は、次のようにして設定された。特色ある学校づくりや高校教育改革の事例を整理すると、5つ程度の側面が共通して見られる。それらはおおよそ「開放性／学外連携」「生徒の多様性への対応」「進路・将来展望を持たせる指導」「教育内容・課程の工夫」「教育方法の工夫」と名づけることができるような側面である。

「開放性／学外連携」とは、学校外の組織との連携や指導者の招聘などによって、生徒を学校外の教育資源に触れさせる活動を伴う側面である。

「生徒の多様性への対応」は、高校進学率が90%を超えた70年代頃から指摘され続けている。高校に進学する生徒が義務教育終了後勉学を続けたいという動機で進学する生徒ばかりではなく、ほとんどの中学校卒業者が高等学校に進学している現状では、学問志向の教科や科目、指導法が一律にすべての生徒に通用するものではない。多様な興味・関心、進路、学習態度などに対応する指導が求められている。その事態への取り組みが各高校での特色として表れてもいるのである。

また、平成23年1月の中教審答申で「ライフステージに応じて様々な学びの場を選択し、職業に必要な知識・技能を身に付け、その成果が評価され」るべきであると指摘されているように、高等学校においても「進路・将来展望を持たせる指導」が強く求められている。

もちろん、今日の高等学校の多様性を鑑みれば、これらの側面にとどまらない様々な取り組みが見られるのであるが、共通の調査項目としては取り上げられていない。それぞれの側面について、生徒が「学校の特色ある方針をどのように理解しているか(Q5、特色理解)」、「特色ある取り組みの現状をどのように認識しているか(Q6、現状認識)」、「自分の現状と学校の特色は適合しているか(Q7、特色適合)」が項目として取り入れられたのである。Q5は学校の特色全般に対する理解・認識を、Q6は実際の教育活動に対する認識をあらわす。それに対しQ7はそのような特色が本人の望むものかどうか、自分に合っていると受け止めているかどうかをたずねる質問項目であり、いわば主観的な認識をあらわす。同じ指導を受けても、生徒によつ

表1 調査項目

Q1 あなたは、自分の高校生活について、どのように考えていますか。「全くちがう」-「全くそうだ」の5件法)

番号	内容
(1)	好きな科目の勉強は自分でどんどん進めたい。
(2)	高校生活に自分なりの目標を持っている。
(3)	この高校に通うことを誇りに思っている。
(4)	将来の進路に役立つ知識や技術を得るために勉強に励みたい。
(5)	何のために高校に行くのか、わからない。
(6)	自分は、この高校で大切にされていると思う。
(7)	勉強は適当にして、学校生活を楽しまたい。
(8)	高校生活で熱中できるものが見つかった。
(9)	この高校に入学してよかったと思う。
(10)	高校卒業後の進路の希望を具体的に考えている。

Q1-2 あなたは、高校卒業後、どのような進路を希望していますか。次の中から、今の考えにもっとも近いものを1つ選んで、その番号に○印をつけてください。

1	大学
2	短期大学
3	専門・専修学校
4	就職
5	まだ決めていない
6	その他

Q5 あなたの学校の様子についてお聞きします。「全くちがう」-「全くそうだ」の5件法)

番号	内容
(1)	この学校では校外の指導者（大学や企業の人など）による学習活動が重視されている。
(2)	この学校では生徒の自主性が尊重されている。
(3)	この学校では将来の目標や生き方について考えさせてくれることが多い。
(4)	この学校では、特色のある教科・科目が設けられている。
(5)	この学校には、学校独自の、魅力のある授業が多い。

表 1 (続き)

Q6 あなたの学校の指導や先生方についてお聞きします。「[全くちがう]」-「全くそうだ」の5件法)

番号	内容
(1)	この学校では、校外の指導者による学習機会が多く設けられている。
(2)	この学校では、生徒が自分の意見を述べる機会が多い。
(3)	この学校では、将来の目標や生き方を考える授業や行事が多く設けられている。
(4)	この学校では、卒業までの学習計画（コースや科目の選択）がよくわかるように説明されている。
(5)	この学校では、工夫がされて楽しい授業が多い。

Q7 あなたはこの学校の授業や指導にどのような印象をもっていますか。「[全くちがう]」-「全くそうだ」の5件法)

番号	内容
(1)	学校の授業だけでなく、校外の指導者による学習機会にも積極的に参加したい。
(2)	この学校では、自分の長所が生かせる機会が多いと思う。
(3)	この学校で得られるものは、将来の進路に役に立ちそうだ。
(4)	この学校の科目やコースは自分の希望によくあっている。
(5)	授業の進め方は自分に適していて、内容がよく理解できそうである。

て影響の受け方は様々であり、個々の受容の程度を知るために設定された項目である。

3. 結果と考察

Q1、Q5、Q6、Q7のそれぞれの項目に対する回答を「全くちがう」を1点、「少しちがう」を2点、「どちらともいえない」を3点、「まあそうだ」を4点、「全くそうだ」を5点とする連続尺度として用いた。

総合学科生徒の特徴を探るため、その他の学科の生徒との平均値の差を見てみる。表2はQ1でたずねた生活意識についての表である(1年次調査)。「総合」は総合学科生徒の平均値、「その他」は他の学科の生徒の平均値である。2群の差の検定(t検定)を行い、両者の差異を検討してみよう。表中のtはスチューデントのt値、pは有意確率である。危険率5%で有意な差があるものはpの欄に*を付した。

(1)「好きな科目の勉強は自分でどんどん進めたい」、(2)「高校生活に自分なりの目標を持っている」、(4)「将来の進路に役立つ知識や技術を得るために勉強に励みたい」、(7)「勉強は適

当にして、学校生活を楽しみたい」、(10)「高校卒業後の進路の希望を具体的に考えている」の5項目において、総合学科生徒は他の学科の生徒よりも高い平均値を示している。一方、(3)「この高校に通うことを誇りに思っている」はあまり高くないことがわかる。意欲を持っていることがうかがえる反面、必ずしも入学した高校自体に対する意識は肯定的とは言えないことがわかる。

同様に、3年次データでは(1)「好きな科目の勉強は自分でどんどん進めたい」、(5)「何のために高校に行くのか、わからない」、(7)「勉強は適当にして、学校生活を楽しみたい」、(10)「高校卒業後の進路の希望を具体的に考えている」に差があり、いずれも総合学科の生徒が高い値を示している(表3)。総合学科生徒の方が有意に低い項目はなかった。

一貫して(1)、(10)に差があることがわかる。つまり、他の学科よりも、学習意欲は高く、進路について具体的に考えているという、学校生活に積極的に取り組み、活動的な総合学科生徒の意識がうかがえる。しかし、(1)とは相反する意識ではあるが、(7)にも差があることもわかる。「勉強は適当にして」という文言があるが、「学校生活を楽しみたい」という部分を総合学科生徒が肯定する傾向が強いと理解できる。ただし、3年次の差は、有意確率4.8% ($t=1.98$) であり、サンプルサイズが大きいことも考えれば(6451票うち総合学科生徒は917票)、差があると明確に言い切れない。他の結果に対する考察もあわせて検討する必要がある。

表2 生活意識の差 (1年次)

Q1	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)
総合	3.83	3.86	3.48	4.06	2.25	2.93	3.09	3.38	3.84	3.73
その他	3.59	3.78	3.60	3.94	2.21	2.93	2.97	3.45	3.83	3.33
t	6.52	2.17	3.09	3.59	1.18	0.22	2.96	1.50	0.35	8.84
p	<.0001*	0.030*	0.002*	0.001*	0.239	0.824	0.003*	0.135	0.725	<.0001*

表3 生活意識の差 (3年次)

Q1	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)
総合	3.80	3.73	3.41	3.96	2.39	3.10	2.97	3.56	3.86	4.21
その他	3.72	3.72	3.47	3.97	2.30	3.05	2.89	3.56	3.83	4.08
t	2.06	0.24	1.47	0.21	2.35	1.68	1.98	0.08	0.74	3.63
p	0.040*	0.814	0.143	0.834	0.019*	0.092	0.048*	0.939	0.457	0.000*

次に、特色理解、現状認識、特色適合についても同様の処理をした(表4～表9)。これらについては、両年次のすべての項目で総合学科の生徒の方が有意に高い値を示している(*印は煩瑣になるので省略)。冒頭でも述べたとおり、総合学科は「普通教育及び専門教育を選択履修を旨として総合的に施す学科」であり、「将来の職業選択を視野に入れた自己の進路への自覚を深めさせる学習を重視」し、「生徒の個性を生かした主体的な学習を通して、学ぶことの楽しさや成就感を体験させる学習を可能にする」教育課程が実施されていることを反映していると言えるだろう。

表 4 特色理解の差 (1 年次)

Q5	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
総合	3.36	3.89	4.14	4.42	4.14
その他	3.06	3.62	3.59	3.64	3.28
t	8.58	7.30	15.63	20.37	22.31
p	<0.0001	<0.0001	<0.0001	<0.0001	<0.0001

表 5 特色理解の差 (3 年次)

Q5	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
総合	3.54	3.76	3.84	4.28	4.02
その他	2.97	3.39	3.62	3.29	2.99
t	14.89	9.76	5.99	24.33	26.59
p	<0.0001	<0.0001	<0.0001	<0.0001	<0.0001

表 6 現状認識の差 (1 年次)

Q6	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
総合	3.41	3.67	4.10	3.88	3.44
その他	2.98	3.19	3.38	3.45	2.91
t	11.94	14.27	21.73	12.50	14.68
p	<0.0001	<0.0001	<0.0001	<0.0001	<0.0001

表 7 現状認識の差 (3 年次)

Q6	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
総合	3.57	3.45	3.52	3.35	3.24
その他	2.97	2.86	3.03	3.11	2.94
t	15.73	16.67	13.95	6.81	8.71
p	<0.0001	<0.0001	<0.0001	<0.0001	<0.0001

表 8 特色適合の差 (1 年次)

Q7	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
総合	3.18	3.52	3.98	3.71	3.24
その他	2.99	3.00	3.63	3.34	2.88
t	5.37	15.65	10.20	10.91	10.50
p	<0.0001	<0.0001	<0.0001	<0.0001	<0.0001

表 9 特色適合の差 (3 年次)

Q7	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
総合	3.19	3.25	3.55	3.51	3.20
その他	3.04	2.86	3.34	3.14	3.00
t	3.91	11.83	6.07	9.90	5.78
p	<0.0001	<0.0001	<0.0001	<0.0001	<0.0001

(2) 意識に影響を及ぼす要因

一般的な傾向としては、学校生活のあり方によって生徒の意識は相当に影響される。1970年代から90年代にかけて盛んに行われた高校の「生徒文化」研究では、学校への帰属感や目的意識、勉学に対する意欲は高等学校の学科種や入学難易度とともに、個々の生徒の進路志望や学業成績と密接な関わりを持つことが示されてきた。どのようなものであれ具体的な進路希望が定まっている生徒は学校に対する帰属感も高い傾向があり、また、その進路が大学である生徒は学業を中心とした学校生活に対して肯定的な意識を持ち、帰属感も高いことが見いだされている。

その命題は現在も有効なのだろうか。上述の研究当時は、上級学校への進学を希望する生徒は普通科、そうでない生徒は(当時の用語では)「職業学科」に進学するという傾向が強く、また、第二次ベビーブーム世代の生徒が高校進学することともあいまって、普通科高校とそれ以外の学科との差異が大きくなっていった時代である。総合学科が設置された1994年は1973年度生まれの第二次ベビーブーム世代が高校を卒業した1991年度の3年後であり、量的拡大は当面不要となり、内容の改革に取り組める時期にあたる。総合学科が「第3の学科」として設置された理由としては、高校卒業後の進路として大学進学を希望するのか、就職を希望するのかを、中学卒業時に決めていない生徒に多様なカリキュラムを3年間提供し、熟考する機会を与えるというものもあった。

したがって、総合学科の生徒と他の学科の生徒とが同じような意識パターンを示すかどうかを調べることによって、総合学科生徒の特質を探ることができると考えた。学業成績はこの調査ではたずねていないが、進路を具体的に考えているか(Q1(10))、その進路先がどのようなものであるか(Q1-2)をたずねているので、これらと在籍する学科、意識との関連を検討してみる。進路志望と意識との関連が、総合学科と他の学科との間で異なるものでなければ「第3の学科」のねらいは達せられたとは言えないだろう。

まず、1年次のデータを用い、Q1の(3)、(6)、(8)、(9)の回答を合計して4点から20点の新たな尺度を作成し、この尺度を〔帰属感〕(以下、〔 〕は変数名を表す。)とした。そして、総合学科に在籍する生徒を「1」、その他の学科の生徒を「0」とするダミー変数〔総合〕を作った。また、Q1(10)でたずねた高校卒業後の進路希望を具体的に考えているかどうかを「全くそうだ」を5点、「全くちがう」を1点とする連続尺度の変数〔進路〕として用いる。さらに、具体的な進路希望先としてQ1-2で「大学」をあげているか否かによって、大学進学を希望している場合は「1」、そうでない場合は「0」とするダミー変数〔大学〕を作った。〔総合〕ダミー、〔大学〕ダミー、〔進路〕の3変数およびこれらの交互作用項を独立変数とし、〔帰属感〕を従属変数として重回帰分析をおこなった。〔総合〕と他の変数とに交互作用が見られれば、総合学科の生徒の意識パターンと他の学科の生徒のそれとは異なることを示す。見られなければ、単に意識の高低の違いを示すにとどまる。

説明変数として、3次までの交互作用をすべて投入したところ、3次項は有意とならなかったため除外し、さらに有意でない2次項を削除したところ、〔大学〕×〔総合〕、〔進路〕×〔総合〕の二つの2次項が有意な項として残ったので、この時点で解釈することにした(表10)。

表 10 1 年次データによる〔帰属感〕の重回帰分析

項	β	t	p
〔進路〕	0.253	13.44	<.0001
〔総合〕	-0.0363	-2.93	0.003
〔大学〕	0.0576	3.26	0.001
〔進路〕 * 〔総合〕	0.0528	2.81	0.005
〔大学〕 * 〔総合〕	-0.083	-4.8	<.0001

調整済み R2 乗 = 6.7%

交互作用項の解釈は多少煩瑣であるが、〔大学〕 × 〔総合〕の交互作用項は、総合学科の生徒は大学進学を希望している場合は、他の学科とは異なり、帰属感が高くないこと、つまり、総合学科の生徒は大学以外の進路を希望している生徒の方が学校に対する帰属感が高いことをあらわしている。また、〔進路〕 × 〔総合〕の交互作用項は、総合学科の生徒は「進路志望が固まっている」度合いに応じて他の学科の生徒よりも、帰属感が高まる度合いが高いと解釈できる。1 年次データからは、総合学科の生徒は他の学科のように大学進学を希望している生徒が帰属感が高いのではなく、むしろそれ以外の進路を希望している生徒が、その進路を具体的に思い描いているときに最も帰属感が高い、すなわち、その学校に対して肯定的な意識を持つのだと言える。

3 年次のデータで同じ分析を行うと、〔総合〕に関する項は有意とならなかった（表11）。残った 2 次項の〔進路〕 × 〔大学〕もさほど強い交互作用ではなく、大学以外の進路希望者の方が、より具体的に進路を考えている方が、帰属感が高いというものであった。一方、〔総合〕は 1 次項でも有意ではない。帰属感に関しては、総合学科の特徴は 3 年次のデータからは認められなかったことになる。入学当初は「この高校」や「この学科」という高校そのもの、学科そのものに対する帰属意識が高いのに対し、3 年生になると、別の要因に帰属感の差異の原因が求められる。これは表 3 からも読み取れることではある。

表 11 3 年次データによる〔帰属感〕の重回帰分析

項	β	t	p
〔進路〕	0.356	28.01	<.0001
〔総合〕	-0.003	-0.25	0.802
〔大学〕	-0.104	-8.66	<.0001
〔進路〕 * 〔大学〕	0.028	2.2	0.028

調整済み R2 乗 = 13.2%

この結果は、1 年次には特徴的な意識パターンを持っていた総合学科の生徒が、3 年次には他の学科と同様のパターンになることを意味している。総合学科が特徴をもった存在として中学生に受け入れられていて、入学前から具体的な大学以外の進路を考えており、その希望をかなえてくれそうな存在として総合学科をとらえていることを示しているのではないだろうか。「問題の背景」で述べた中教審の指摘が正しいかどうか、再検討の必要があるのではないだろう

うか。3年次では総合学科の生徒も、他の学科と同じく大学進学を希望する生徒の方が高い帰属感を持つ。1年次の進路希望は、これからの3年間の高校生活の到達点としての方向を示す目標であり、成績や適性を正確につかんで表出したものではないだろう。たとえば、「この高校の卒業生の多くは大学進学するだろう」といった、卒業生の実績や保護者の希望といった、周囲の情報などに多く影響されたものではないだろうか。それに対し、3年次(調査時期は7月)には、適性や成績、さらには家計の状況や入学難易度なども勘案して、半年程度で決定して卒業後に実際に進んでいくべき具体的な目標という意味合いをもつ。単純に「勉強がよくできるから大学へ行く」とか「数学や理科が得意でないから文科系の大学に進学するのがよい」といったことではなくなる。高い意識をもって勉学に励んだ生徒が大学進学を希望していると判断できるのではないだろうか。

他面では、他の学科に入学した生徒と比較して、大学進学以外の進路をとろうとする総合学科の生徒に、帰属感を強く持たせられない結果をも示していることになる。

同様に、Q1 (1)、(2)、(4)、(5)、(7) の合計を〔目的意識〕として分析を行った。ただし、(5) と (7) は逆転項目であるので、数値を逆転させて加算している。

1年次データでは3次項、2次項で有意な項はなかった(表12)。「進路」、「大学」、「総合」がそれぞれ独立に〔目的意識〕と関連している。3年次では〔総合〕は1次項でも2次項でも有意にならなかった(表13)。大学進学を希望し、より具体的に進路を考えている生徒の目的意識が高いことが示されているが、その関係は総合学科とそれ以外の学科で異なるところはないことになる。

表12 1年次データによる〔目的意識〕の重回帰分析

項	β	t	p
〔進路〕	0.393	36.59	<.0001
〔総合〕	0.022	2.07	0.038
〔大学〕	0.192	17.63	<.0001

調整済み R2 乗 = 20.0%

表13 3年次データによる〔目的意識〕の重回帰分析

項	β	t	p
〔進路〕	0.419	35.12	<.0001
〔大学〕	0.224	20.37	<.0001
〔進路〕 * 〔大学〕	0.026	2.22	0.027

調整済み R2 乗 = 23.2%

(3) 特色ある学校づくりに対する総合学科生徒の意識

次に、Q5～Q7でたずねた特色理解や現状認識、特色への適合の意識と進路意識や学科はどのように関連するのだろうか。再び、「大学」と「進路」、「総合」を用いて探ることにする。ここでは、Q5、Q6、Q7の15項目の合計得点を〔特色認識〕とし従属変数とする。他の手続は

前節と同様とした。

その結果、1年次では〔進路〕と〔総合〕の2次項が有意な項として残された。進路の具体性と特色に対する認識との関連が、総合学科の方が強いことを意味している。総合学科では、より具体的に進路を決めている生徒の方がその学校が特色を持っていると認識していることになる。一方、他の学科では、進路の具体性と学校の特色に対する意識との関連は総合学科ほど強くないことがわかる。総合学科においては、進路に関する見通しをもたせる教育が学校の特色づくりと強く結びついており、その重要性が他の学科より高いと言えるだろう。

3年次データでは有意な項として〔進路〕×〔大学〕と〔進路〕×〔総合〕の二つの2次項が残される。〔進路〕と〔総合〕の交互作用の解釈を行うと、1年次と同様に、総合学科の生徒は他の学科よりも進路に関する指導に意を用いなければならないことが示されているのではないだろうか。一方〔進路〕×〔大学〕については負の効果が見られる。すなわち具体的な目標として大学進学を希望している生徒は、その学校の特色をあまり強く認識していないことになる。大学進学には、特色ある学校づくりが必要ではないとは言えないとしても、必ずしも、その特色を意識する生徒が進路意識につないでいくことが少ないということを意味するのだろうか。

表 14 1年次データによる〔特色認識〕の重回帰分析

項	β	t	p
〔進路〕	0.256	14.05	<.0001
〔総合〕	0.223	18.85	<.0001
〔大学〕	0.089	7.83	<.0001
〔進路〕*〔総合〕	0.064	3.51	0.001

調整済み R2 乗 = 11.0%

表 15 3年次データによる〔特色認識〕の重回帰分析

項	β	t	p
〔進路〕	0.289	15.95	<.0001
〔総合〕	0.203	16.50	<.0001
〔大学〕	0.006	0.46	0.644
〔進路〕*〔大学〕	-0.030	-2.32	0.021
〔進路〕*〔総合〕	0.072	4.00	<.0001

調整済み R2 乗 = 10.0%

4. まとめ

本稿では、近畿2府4県の公立高等学校生徒を対象にしたアンケート調査を、総合学科の生徒に着目して分析した。

総合学科は設置当初から普通科、専門学科に並ぶ第3の学科とされ、各府県の学校教育施策の、いわば「目玉」としての位置づけで、特色ある学校づくりを意識して運営されてきた。そ

して、この調査では生徒の意識に一定の特徴が見られることが明らかとなった。

総合学科と他の学科との比較を通じて、学校への帰属感や高校生活全般への目的意識が高いことが見いだされた。また、学校の教育活動の特色に対する認識は、他の学科に比べ非常に高いことがわかった。

しかし、総合学科の生徒同士で比較すると、そのような意識は卒業後の進路に対する意識によって差異が生じていることも示唆されている。また他の学科と比較すると、進路と意識との関連のパターンに若干の違いがあることが見いだされた。

本稿では、変数ないしは変数群を個別に検討したが、全体としての意識構造と呼ぶべきものを示すことはできなかった。このアンケートは、各高等学校の特色ある教育活動に対する生徒の認識がどのような構造を持っているかを明らかにし、その構造が学科の種類や府県、学校ごとにどのような特色を持っているかをさぐることを目指して作成されている。そのためには、潜在変数を媒介にして構造をさぐるための共分散構造分析と呼ばれる手法で解析することが必要であるが、本稿では触れることができなかった。期して今後の課題としたい。

参考文献

- 中央教育審議会 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について 2011
近畿高等学校教育研究協議会「研究プロジェクト報告」『高校教育研究』第46号 2011
高等学校教育の改革の推進に関する会議 第4次報告（総合学科について）1993
文部省初等中等教育局長通知 総合学科について 1993